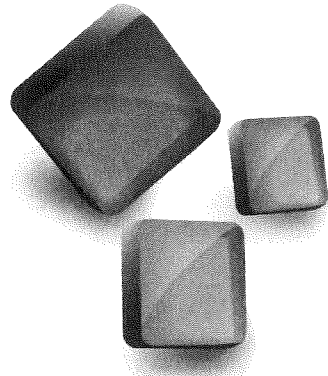


2月1日午前入試



2014 年度
宝仙学園中学校共学部 理数インター
入学試験問題

国 語

2月1日午前入試

【注意事項】

1. 試験時間は50分です。
2. 問題は1ページから10ページまであります。
3. 解答はすべて解答用紙に記入してください。
4. 解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。
5. 設問に字数制限がある場合には、句読点も字数に数えます。

自分を信じて、最後まであきらめずに！



宝仙学園中学校共学部 理数インター

一

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数制限がある場合には、句読点・記号も字数に数えます。

「林業」と聞くと、どんな情景をイメージするだろうか。

ある人は、伐採^{ばっさい}シーンだと言う。森の木をどんどん切り倒して木材を持ち出す光景を思い浮かべる。だから、林業とは自然破壊産業だとする声も出てくる。

一方で、山に木を植えたり下草を刈り取る様子を脳裏^{のうり}に描く人もいる。だから、森をつくり育てる仕事だと。この場合、林業は緑化を進める環境産業となる。

① こうしたイメージは、どちらも林業の一面ではあるが、いずれも正しく林業を捉えていない。人が山や森に手を加える姿の一部を切り取っただけだからだ。木を植える部分、あるいは木を伐る作業だけに注目するのは、林業の本質を見誤^{まちが}ってしまっただろう。

私は、木を植えるところからスタートして、何十年もかけて森を育てたうえで収穫^{とと}（伐採）し、さらに木を求める人々に供するまでの流れ全体を林業だと考えている。当たり前のことだが、生産がなければ収穫もできないし、需要がなければ収穫も必要ない。いや需要がないのなら生産もしないだろう。こうした因果関係を見つめなければならない。ただ林業は、一巡するのに人の一生を超えるほどの長い時間を費やすため、その流れを見落し^{おとし}がちになっている。

それでも、植林から伐採までが林業だということは、説明すればわかってもらえる。I、山から木を伐り出した時点で終わら^{あとし}だろうか。伐採跡地は？ そして伐った木の行く末は？ これは林業とは別の世界だろうか。

本来なら伐採跡地に再び森を育てる努力をしなければならない。さもないと持続した経営にならないし、資源としても循環しない。そして丸太のままでは人々の利用に適さないから、加工過程も無視すべきでない。利用のためには、製材だけでなく合板や集成材、ボード類、さらにチップに変身させることもある。その分野を林業とは別に「木材産業」と呼ぶことも多いが、私は森と木につながった林業の一部だとみなしたい。

さらに加工された木材が、住宅や家具、木の道具、あるいは紙などに二次加工されて、*エンドユーザー向きの商品に生まれ変わる過程は、本来なら建築や木工、製紙の分野だが、これらも林業の根幹から派生した大きな流れの一部と捉えてみよう。

私は、これらの林業周辺の産業分野に加えて、森林の生態系や地域の景観、そして山村地域に住み、何らかの形で森と関わる人々の営みも含めていいのではないかと考える。林業をビジネスの世界に閉じ込めると、きしみを生じるからだ。林業の存在する地域では、人工林が生態系や景観の一部に加わっているし、人々の暮らしに多大な影響を与えている。この部分を見つめることで、林業は環境や観光とも共存できるのである。

そこで山を舞台に木材を生産するだけの*狭義的林業ではなく、もっと森や木に関わる周辺の要素まで*包含した*広義の世界として認識してみよう。このような森と木に関わるトータルな世界を、ここでは「大林業」と呼んでおく。

② なぜ「大林業」という、大層な提案をするのか。いくらなんでも間口^{まぐち}を広げすぎではないか、と思われる方もいるだろう。だが私は、林業の全体像を理解するには、業界内にとどまらず、大きな社会構造から俯瞰^{ふくかん}しないと難しいと思うのだ。それは同時に、自身の関心を突き詰めた結果でもある。A

私は、自分自身が林業を営むわけではないし、親族に十分な山林を持つ者でもない。その点では、まったく部外者だ。

私の森に関する記憶は、子供の頃に遡^{さかのぼ}る。身近な山は、なだらかな里山で雑木林に覆^{おお}われた世界だった。そこで探検ごっこや秘密基地づくりもした。少し長じると登山も始めた。さらにボルネオの熱帯雨林に魅^みせられて幾度^{いくど}となく足を運んだ。B

やがて関心は、森林の生態系に向かった。*多種多様な生命が織りなす世界への興味が高まったのだ。植物だけでなく動物や菌類、それに土壌や気象まで、さまざまな条件が織りなして*精妙^{せいみょう}な世界を作っている森林に魅^みせられたからだ。

最初の対象は熱帯雨林だったが、やがて日本の森林に移り、日本では天然林だけでなく人工林も重要なことに気づいた。人工林は林業あつての存在である。そこで林業の世界に足を踏み入れるが、当然ながら林業は人が営むもので、その舞台は山村。そこで山村にも目を向け始めた。山里に生きる人々に引きつけられたと言ってもよい。C

II、その山村は今や病んでいる。それどころか存亡^{そんぼう}の危機にある集落も少なくない。その原因を探ると、やはり林業の不振に行き着く。だが林業は都会の木材需要に支えられて成立している。決して林業は閉じた系ではなく、常に街とつながった存在なのだ。だから日本の社会と経済に目をそむけたままでは、林業の動きを理解できない。

III 日本経済は国際社会とも結びついている。外材の輸入量の変化や世界的な資源危機、地球環境問題、日本の人口減少、そして人々の意識の変化を語らずに、山間の消えゆく集落の問題は説明できないのではないか……。まるでXゲームのように、③ 林業の*範疇^{はんちゆう}を拡大してしまったのだ。

IV、「大林業」のような発想で全体像を把握しないと、森と人の関わりは理解できないと感じるようになった。④ 近年、多くの人が林業への関心を持ち始めたようだ。その広がりには驚くほどだ。林業どころか山や森林、田舎社会に縁のなかったような都会人が林業について熱く語る。まったく畑違いのビジネスマンが、どう考えても労多くて益少なき林業への参入をめざす。そういう人々に出会うことが増えた。D

ただ、彼らは、最初から林業経営や木材生産技術に興味を持ったわけではないだろう。おそらく彼らが林業に関心を持った*とば口は、私と同じように山や森、山里の人々の顔なのではないか。美しい森林を守りたいと思い、小さな山里集落の暮らしを保ちたいと感じたとき、その方策としてたどり着いたのが林業だったのではないかと思う。だから彼らの思いは、狭義的林業には収まり切れない。もっと周辺の産業や社会、そして自然界まで包含した「大林業」を描くべきではないかと思うのである。

(注) ※ エンドユーザー……消費者。

※ 狭義……狭く限定された意味。

※ 包含……中に含み込んでいること。

※ 広義……狭義の対義語。

※ 俯瞰……高い所から見下ろすように、全体を見渡すこと。

※ 精妙……すぐれてたくみなこと。

※ 範疇……似た性質のものが含まれる範囲のこと。カテゴリ。

※ とば口……入り口。

問一 この文章は以下の部分が欠落しています。この一文は本文中の **A** ～ **D** のどこに入りますか。記号で答えなさい。

そんな森との触れ合いが、自分の原点である。

問二 **I** ～ **IV** に入る言葉として最も適当なものを次の中から一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使ってはいいません。

ア さらに イ では ウ だから エ ところが オ たといえば

問三 傍線部①「こうしたイメージは、どちらも林業の一面ではあるが、いずれも正しく林業を捉えていない」について、次の問いに答えなさい。

A 「こうしたイメージ」とはどのようなものですか。本文中から二十字程度で二つ抜き出さない。

B 「正しく林業を捉え」られない理由を筆者はどのように考えていますか。その理由を示した一文を本文中から抜き出し、最初の五字を抜き出さない。

問四 傍線部②「なぜ『大林業』という、大層な提案をするのか」とありますが、筆者が「大林業」を提案する理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 筆者は「部外者」なので、林業の外側の社会から眺めることでしか林業を理解することができないから。

イ 筆者が関心を持っている熱帯雨林などの自然を守るにあたり、日本の林業からたくさん学ぶべきことがあるから。

ウ 林業は自然環境や人々に深くかわっており、それらの要素を切り離して考えることはできないから。

エ 林業は自然環境に左右されるものであり、林業が不振になると人々の生活は大きな影響を受けるものだから。

問五 **X** に入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 連想

イ 伝言

ウ シミュレーション

エ シーソー

問六 傍線部③「林業の範疇を拡大してしまった」とありますが、そのように拡大した林業を表す語句を十字以上十五字以内で探し、抜き出さない。

問七 傍線部④「近年、多くの人が林業への関心を持ち始めたようだ」とありますが、筆者が考える「多くの人」の「林業への関心」のきっかけは何ですか。理由を説明しなさい。

問八 次のア～エが本文の内容に合致していれば○、合致していなければ×を、それぞれ解答欄に記入しなさい。ただし、すべて同じ記号を答えた場合は、全問不正解とします。

ア 人々が「林業」をイメージするとき、その一部分しか考えられていないことがある。

イ 林業においては、伐採までに時間がかかるために需要と供給の関係は成立しにくい。

ウ 手間がかかる木材の加工は、林業とは別の加工専門の産業が行うことになっている。

エ 林業を正しく理解するには、林業に関わる社会や経済を理解しなければならない。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数制限がある場合には、句読点・記号も字数に数えます。

①「実は、シヨーちゃんに謝ろうと思ってたんだ」
帰り道、草太が真面目な口調で話しかけてきた。

「なんだよ、あらたまって」

昇平はちらりと草太の横顔をうかがった。自転車を並べて走っているの、じっと見ているわけにはいかないのだ。
二人は学校指定のヘルメットをかぶり、浅川の土手のサイクリングロードを走っていた。家に帰るには遠回りのコースだが、走って気持ちいいのはこっちの道なのだ。

草太はまっすぐ前を見て走っていたが、やがて言いづらそうに口を開いた。

「……俺、サッカー部に入るのよそうかと思うんだ」

「どうして？」

昇平は驚いて尋ねた。――昇平もサッカー部はやめて野球部にしようかと迷っていたのだ。まさか草太の方から告げられるとは思わなかった。

「水泳部に入りたいと思ってさ」

前を向いたまま、草太はゆっくりと喋っていた。

「さっきのノブ君が教えてくれたんだ。水泳部はプールに入るのは夏場だけで、あとは筋トレとかの個人練習が多いって。――市営の温水プールに行ってもいいし、体力作りのために自転車で走り込みっていうのも認めてもらえるんだってさ」

伸男は小学校の頃からスイミングスクールに通っていて、そこで浅川中の水泳部の情報を仕入れたらしい。本気でやりたい部員は部活と掛け持ちしながらスクール中心に練習しているし、籍だけ水泳部に置いてるくに練習しない幽霊部員も多いというのだ。

②要するに、学校のプールが使える時期にしか活動しない部なのだ。個人練習というのは名目だけで、オフシーズンには好き勝手に過ごしていいしかなかった。

「部活で自転車に乗れるとこなんて他にないし、水泳って自転車選手のトレーニングにもいいらしいんだ。ノブ君のお父さんは、競輪選手のリハビリとかも手伝ってたってさ」

なんでも、伸男の父はかつてバタフライの[※]国体選手だったのだそう。大学の研究所に勤めながら水泳のコーチもしていて、それで伸男もスイミングスクールに通っているというわけだ。

伸男に[※]感化され、草太はすっかり水泳部入りの意志を固めているらしい。ちょっと興奮した口調で昇平にも誘いをかけてきた。

「シヨーちゃんも一緒に入ろうよ。水泳部」

しかし昇平は、すぐに首を振っていた。

「俺は……サッカー部か、そうじゃなくて野球部だな」

「野球部？」

「うん。クラスの奴から強引に誘われてんだ。お前なら絶対レギュラーになれるぜって」

少しばかり大げさに言ったのは、^③昇平の中で妙な対抗心が膨らんだからだだった。――草太は一年一組で伸男と急速に仲良くなっているらしいが、自分だって新しい友達ができただと言ってやりたかった。

「ちようどいいかもな。二人ともサッカー部はやめといて、ソータは水泳部、俺は野球部って感じでさ」

そんな^④Xを言いながら、昇平はペダルをこぐ脚に力をこめた。

クラスも部活も別々となったせいで、昇平が草太と過ごすことは少なくなった。朝の登校は一緒でも、その後は一度も顔を合わせない日もあるほどだった。

小学校時代、塾や習い事に縁のなかった昇平は、放課後を丸々遊び時間にできた。しかし中学では、放課後はすぐに部活の時間となり、家に帰るのは日も沈んだ夕食時だ。その後で遊びに行くわけにもいかなかったし部活でしごかれた後では遊ぶ余力などなかった。

噂には聞いていたが、野球部の練習はかなり厳しいものだった。練習前はさんざんランニングをさせられ、先輩の練習中はずっと球拾い、それが終わると腕立て伏せと腹筋で、バットに触るのなんて後片付けの時だけという日々が続いていたのだ。

先輩の話によると、一学期はずっとそんな練習が続くらしい。きつく単調な練習についていけない者は脱落して退部していくというわけで、いわば根性試しの見習い期間なのだ。

「一年も、実力ある奴は秋の新人戦に使うからな」

監督を務める体育教師の浜田先生も、新入部員に対して何度もそう言っていた。いつから普通の練習をさせてくれるのかは教えてくれなかったが、誰が頑張っているかはちゃんと見ているというのだ。

そうになると、^④昇平としても負けてたまるかという気分になってくる。毎日の生活も野球部のきつい練習を中心に回るようになっていった。

部活の時まで体力を温存しようと思うと、草太のように朝から自転車で風ヶ丘の登り坂に挑むわけにもいかない。そして帰宅する時には、練習で疲れて坂を駆け登る力など残ってはいなかった。

入学式以来、草太の方から昇平の家まで迎えに来るのは毎朝の習慣になっていて、昇平の家族もすっかりそれに馴染んでいた。五月からは牛乳屋

に頼んで家族の分の他にもう一本配達してもらったようにしたほどだ。

「はい草太くん、今日もご苦労さま」

息を乱して坂を登ってきた草太に、母はトロフィーでも授与するように牛乳瓶を手渡す。草太が礼を言ってそれを飲んでる間に、昇平が鞆を背負って家を出るのである。

草太が牛乳を飲み干すまでには、昇平も自転車にまたがっている。母が空になった瓶を受け取った後、二人して出発するのだった。

「今日はいけたか？」

「……ダメだった」

坂に入る前、いつもそんな会話を交わした。しかしさすがの草太も、まだ足をつかずに坂を登りきるところまでは至っていなかった。

はじめのうち、昇平はそう聞くたびに安心してた。自分より先に登り坂を征服されるのが悔しくて、草太に先を越されなくなかったのだ。

⑥ だけど日がたつうちに、その気持ちはだんだんと変わってきた。——草太に負けたくないと思うのと同時に、草太に頑張っただけの日がたつうちに、その気持ちはだんだんと変わってきたのだ。

二人は毎朝、風ヶ丘の坂を一気に下って学校に向かう。ブレーキから手を離して加速していく最中、昇平はふと思ったのだった。

この坂道を、誰よりも先に下りきったのは自分だ。今だって、草太よりも長くブレーキをこらえて突っ走ることができる。

⑦ だったら、登り坂は草太に譲ってもいいのかもしれない。そうならば、昇平は下り坂、草太は登り坂と、一つの坂道を二人で分け合う形になるのだ。それも悪くはない気がしたし、むしろその方がいいとも思った。

最初に登り坂を征服する資格があるのは、くる日もくる日も坂に挑み続ける草太の方だ。——そんな風に考えるのは、不思議といい気分だった。

(竹内真『自転車少年記』一部改変)

(注) ※ 国体……国民体育大会のこと。

※ 感化……人に影響を与えること。

問一 傍線部①「『実は、シヨーちゃんに謝ろうと思ってたんだ』とありますが、なぜ草太は昇平に誤ろうと思っていたのですか。その理由を説明したものと最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 一緒に野球部に入ることではできないと告白しようと思っているから。

イ 一緒にサッカー部に入ることではできないとずっと言えずにいたから。

ウ 一緒にサッカー部に入るはずだったが、そうしないことに決めたから。

エ 一緒に水泳部に入ろうと仲男に誘われていることを黙っていたから。

問二 傍線部②「要するに、学校のプールが使える時期にしか活動しない部なのだ」とありますが、それはどんなことを意味しているのですか。それを説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 部活動としては負担が軽いので、自由になる時間が多いということ。

イ 部活動としては自由が利くので、スクール中心で練習ができるということ。

ウ 部活動としては活動に限りがあるので、物足りないということ。

エ 部活動としては時期が短いので、トレーニングにならないということ。

問三 傍線部③「昇平の中で妙な対抗心が膨らんだからだった」とありますが、何に対する「対抗心」ですか。簡潔に説明しなさい。

問四 X に入る言葉として最も適当な慣用句を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 本音

イ 屁理屈

ウ 嫌味

エ 強がり

問五 傍線部④「昇平としても負けてたまるかという気分になってくる」とありますが、昇平は何に対して「負けてたまるか」と思ったのですか。簡潔に説明しなさい。

問六 傍線部⑤「息を乱して坂を登ってきた草太に、母はトロフィーでも授与するように牛乳瓶を手渡す」とありますが、母はなぜこのようにするのですか。母の気持ちを説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 傾斜のきつい風ヶ丘の登り坂を、足をつくこともなく登りきって来ることをほめたたいという気持ち。
イ 足をつかずに登りきることが難しい、傾斜のきつい風ヶ丘の登り坂を登ってきたことへのねぎらいの気持ち。
ウ 息子の昇平の仲の良い友達である草太が、毎朝わざわざ昇平を迎えに来てくれることへの感謝の気持ち。
エ 毎朝わざわざ迎えに来てくれるのに、そんな草太を息子の昇平が毎度待たせるのですまないという気持ち。

問七 傍線部⑥「だけど日がたつうちに、その気持ちはだんだん変わってきた」とありますが、昇平の気持ちの変化を説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 風ヶ丘の登り坂を足をつかずに登りきることについて、草太のやる気を疑っていたが、その熱意を認める気持ちになった。
イ 風ヶ丘の登り坂を足をつかずに登りきることについて、草太に対抗する気持ちがあつたが、負けを認める気持ちになった。
ウ 風ヶ丘の登り坂を足をつかずに登りきることについて、まったく無関心だったが、草太と張り合う気持ちが生まれた。
エ 風ヶ丘の登り坂を足をつかずに登りきることについて、草太と張り合う気持ちがあつたが、応援する気持ちになった。

問八 傍線部⑦「それも悪くはない気がしたし、むしろその方がいいとも思った」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 一つの坂道を草太と昇平が登りと下りをそれぞれ征服し、競い合うのではなく二人でその誇りや名誉を共有したいということ。
イ 一つの坂道を草太と昇平が登りと下りをそれぞれが譲り合うことで、疎遠になってしまった仲を修復したいということ。
ウ 一つの坂道でも下りよりも登りの方が難しいので、それを征服するなら草太の方が優れていると昇平が認めるということ。
エ 一つの坂道の征服者は登り坂を征服した者であり、その地位に最も近いのは昇平ではなく努力している草太だということ。

三 次の①～⑤の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 来年の講演をイライする。
② 身の毛のよだつようなキョウフ。
③ グウスウの割り算をする。
④ アフのようにはない命。
⑤ 成長イチジルしい。

四 次の①～⑤の傍線部の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

- ① 建物と建物の隙間の土地。
② 繊維の種類や特徴を知る。
③ 悠久の時を感じさせるもの。
④ 乾燥により肌荒れる。
⑤ 特別に観覧席を設ける。

五 次の①～⑤の□に漢字一字を入れて、下の意味になるように慣用句を完成させなさい。

- ① 頭を□える ……良い考えが浮かばず、考え込む。
② 腕に□えがある ……自信があり、今でも十分に実力を発揮できること。
③ 顔を□す ……会合などに頼まれて出席すること。
④ □が□らない ……負け惜しみを言うこと。
⑤ 心を□す ……警戒心を解き、親しむこと。

国語解答用紙

受験番号
氏 名

※

一
問一
問二
I
II
III
IV

問三
20
15

※

A
20
15

B
10
15

問四
問五

問六
10
15

問七

問八
ア
イ
ウ
エ

二
問一
問二

問三

※

問四

問五

問六
問七
問八

三
①
②
③
④
⑤

※

四
①
②
③
④
⑤

※

五
①
②
③
④
⑤

※